



平和へのメッセージ from 知覧 第33回スピーチコンテスト

いのちの尊さ、平和の大切さのメッセージを発信

8月15日、第33回スピーチコンテストが開催され、中学校の部で特選を受賞した川辺中学校2年の大坪芽生さんと小学生の部の平和作文コンテストで優秀賞に選ばれた佃駿翔さんの作文を原文のまま紹介します。

「感謝して生きるということ」

川辺中学校2年 大坪 芽生



私の祖母は五年前に他界しました。私がまだ小学三年生の頃だったので、残念ながらはっきりと覚えていません。ただ、祖母がお仏壇に手を合わせながら、「ありがとう」とつぶやいていた光景は記憶に残っています。母に祖母のことを尋ねてみると、大変な中で四人の子どもを育てた苦労話をよくしていたそうです。日を追うごとに認知症は進んでいきましたが、介護施設を利用することでなんとか私達と家での暮らしを続けることができていたそうです。そしてたくさんの人に支えられて八八歳で亡くなりました。私はお仏壇に手を合わせるとき、祖母の「ありがとう」をよく思い出します。「ばあ

ちゃん是谁に向かって言っていたんだろうか。」そんなことを考えたこともありましたが、理由は分からないままでした。

先日、私は南九州市内の介護施設「いろ葉」の代表、中迎さんのお話を聴く機会がありました。母が聴きたいと申し込みをしていたみたいで、私は付き添い程度の軽い気持ちで行ったのですが、そのお話の内容に衝撃を受けました。それは「三つのいき方を支える介護」のお話でした。「生き方」「活き方」「逝き方」の三つです。さらに高齢者の方と過ごす日常の様子を面白おかしく伝えて下さいました。中でも一番心に残ったのは「逝き方」のお話でした。お手伝いが必要になった高齢者の方の「逝き方」を支えることがその方の「生き方」を支えることであるという内容でした。それまで私は人がどのようにに死に逝くのか深く考えたことはありませんでした。まだ中学生だし、自分がどのように死んでいきたいのかなども考える機会なんてありませんでした。しかし、お話を聞いて「逝き方」を考えたとき、ふと目の前に今世界中で起こっている様々な紛争や気候変動

や飢餓などの問題が思い浮かびました。一三歳の自分が暮らしている平和な日本のこと。なんの心配をすることもなく学校に通い部活に行って汗を流し、友達と笑いあっていること。そしてこれは当たり前ではないということ。「死ぬ」ということを考えたときに初めて「生きる・生きている」ということに目が向きハッとしました。爆弾の不安におびえることなく、空腹に苦しむこともなく毎朝目が覚めて夜になれば温かい布団で安心して眠れること。それを当たり前だと思って生きている毎日、当たり前だと思って生きている自分に気がつきました。そして「ありがとう」とつぶやいていた祖母の姿が心の中にポンと現れて、ニコッと笑ったような気がしました。辛い時代を生きてきた祖母の言葉には、こうして命があること、日々その命を続けていけることに「感謝すること」が込められていたんだと思いました。

生きていることを支えてくれるすべてに感謝すること。私は、豊かで平和な時代にこの日本に生まれたために、見失ってしまいがちだったのかもかもしれません。そのことに、今気がついてよかったと思います。これから私は「感謝」を忘れずに、しっかりと自分の生き方をみつけていきたいと思っています。



「自分らしく生きる」

粟ヶ窪小学校6年 佃 駿翔



「麦のように生きろ！」

「はだしのゲン」という本に出てくるセリフだ。主人公の元は、広島市に住んでおり、原爆で家族を失った。その後、原爆で親を亡くした子供と仲良くなり、生活していく姿を描いた話だ。元はいつも、原爆で亡くなった父から、

「麦のように立派に生きろ！」

と言われていた。麦は何度踏まれても起き上がる強い生命力をもっているから、そんな麦のように生きることがこの時代には必要だったのだと思う。しかし、だれもが麦のように強く生きられるだろうか。強くなければ生き残っていけないのだろうか。

最近、テレビをつけるとよく見

るのが、ロシアのウクライナ侵攻だ。爆弾が落ちる映像や、道路に残っている壊れた戦車・壊れたビルなどの映像がたくさん流れる。そして、そんな中でも、力強く生きていく人の姿がある。こんな状況の中で生きていくのは、まさに麦のように力強くないとできない。しかし、どこか寂しそうにも見えるのは僕だけではないと思う。そして僕にはこう聞こえる。

「本当はこんな風に生きたくないのに。」

一昨年、学校の社会科見学で知覧特攻平和会館に行った。平和会館には、戦争で亡くなった若い人の写真がたくさんかざってあった。そして家族への手紙や隊員が着ていた服や靴・バッグなども展示されていた。どれもボロボロで、焼けたあとがあった。残された手紙や道具からは、「お国のために行ってきます。」というような強い気持ちを感じ、写真をかざられた人たちは、まさに麦のように強く生きた人たちのように思えた。しかし、平和会館を見て回るうちにそれは違う気がしてきた。残された手紙の中には、「もっとこんなことがしたい」と生きたいという素直

な気持ちを書かれたものがあつた。また、案内してくれた方から、三角兵舎の枕は夜にいつもびしょびしょにぬれていたという話も聞いた。

「本当はこんな風に生きたくないかったのに。」という声がここでも聞こえてきそうな気がした。ぼくは、隊員がどのような気持ちで過ごしたのか想像してみたが、どうしても分からなかった。僕の身近では、爆弾におびえたり、家族が戦争に行ったりすることがないからだ。戦いの中で、麦のように強く生きていくには、相当な覚悟が必要だと思った。

五月三日知覧特攻平和会館で三年ぶりに慰霊祭が行われたというニュースを見た。ニュースでは、「残された家族や関係者が高齢になつてきている。日本人の九割が戦争を知らない世代となった。」と報じていた。また遺族の方は、「命の尊さをこれからも語り継いでいく。」と、言っていた。

今、日本は戦争がなく平和だと思ふ。麦のように強く、たくましく生きていくことも素晴らしいことだ。しかし、麦のように力強くなくても、自分らしく生きていくほうがずっといい。六年生になつて社会科の授業で日本国憲法について学習した。日本国憲法の三つ

の原則の中には、平和主義に並んで、基本的人権の尊重というものがある。だれもが自分らしく生きていける世界は本当に素晴らしいと思う。一日でも早く世界に平和が戻ることを祈っている。僕は、戦争の恐ろしさを次の世代に伝えていく。そして、

「自分らしく生きて大丈夫だよ。」と言える世の中にしていきたい。

審査結果

中学生の部

最優秀賞 濱村 直史 さん

優秀賞 稲田 美空 さん
皇徳寺中学校 3年（鹿児島市）

特選 森田 未空 さん
伊敷中学校 3年（鹿児島市）

特選 大坪 芽生 さん
川辺中学校 2年（南九州市）

高校生の部

最優秀賞 井手 美優 さん

優秀賞 喜傾 あさひ さん
九州文化学園高等学校 3年（長崎県）

特選 佐藤 ひかる さん
東明館学園東明館高等学校 2年（福岡県）

特選 前田 蒼 さん
鹿児島修学館高等学校 2年（鹿児島県）

一般の部

特選 感王寺 美智子 さん（福岡県）



～南九州市立3中生徒会交換会～

生徒会がオンラインで交流！



8月9日、頤娃中学校、知覧中学校、川辺中学校の生徒会が交換会を行いました。新型コロナウイルス感染症が拡大する中で、今回は、整備されたICT環境を利用し、オンラインで実施しました。お互いの役員や生徒会活動について紹介をした後、各学校から出された質問事項をもとに活発な意見交換を行い、交流を深めました。情報交換を行うことで、互いのよさを認め合い、自校の活動をさらに充実させる絶好の機会となりました。

～「知覧・平和の水辺づくり事業」の除幕式～

追悼をささげ、平和を誓う噴水



8月11日、知覧平和公園で「知覧・平和の水辺づくり事業」除幕式が開催され、寄附者らをはじめ約50人が参加しました。

本事業では、77年前に沖縄の海で尊い命を落とされた多くの特攻隊員を追悼し、平和を誓うためのモニュメントとして、「知覧・平和の水辺」を竣工いたしました。

市長は戦争の悲惨さを説き、「恒久平和の確立に力を尽くすことが今を生きる私たちに課せられた命題である」と述べました。

～わくわく体験 in 虹花～

実験を通して新たな発見！



8月20日、知覧地区公民館でわくわく体験が開催されました。鹿児島大学教育学部の学生4人が先生となり、小学生19人と磁石を使った実験や塩を使った雪の実験を行いました。小学校低学年の児童も高学年の児童と意見を交換しながら、実験に取り組んでいました。

教育学部3年の馬場さんと西村さんは「子どもたちに実験を通して理科を身近な存在に感じてほしい」と話しました。

～ウミガメ放流会～

大きくなって帰ってきてね！



8月19日、松ヶ浦シーサイドパークにてウミガメの放流会が行われました。

放流会では、松ヶ浦小の5、6年生6人によるウミガメの卵の保護、管理などの保護研究や環境汚染、SDGsについて発表を行いました。その後、砂浜にまた戻って来るようお願いながらウミガメを海へ放流しました。参加者は、砂浜から波に乗るウミガメが見えなくなるまで見送っていました。